

心をたもつ ヒント

コロナを
乗り切る

「懸賞生活」
なすびさん

テレビ番組の企画のため20年ほど前に計1年3カ月の間、1人部屋に閉じこもって懸賞で当たった品物だけで過ごしました。人と会うことも話すこともできず、自殺も考えるほどでした。絶望の中で部屋の外から、子どものはしゃぐ声や人々が行き交う音が聞こえて「一人じやな

「小さな幸せ」孤独癒やす

1975年、福島市出身。俳優。伝説的なバラエティ番組「進め！電波少年」で懸賞だけで生活する企画に挑戦した。

「懸賞生活」のなすびさん



日記を書くのも、誰かと話しているような気分になり、支えになりました。まさか出版されてベストセラーになるとは思っ

ていませんでした。

人間は数カ月間外に出なくても死にません。懸賞生活ではドッグフードでしのいだこともありました。最もつらいのは孤独感。本当に地獄のような日々でした。あの経験を経て、どんな困難も乗り越えられると思えるようになりました。ただ、もう二度とやりたくありません。

普段は東京で生活しています。講演活動などの仕事がなく、今は福島市の実家で過ごしています。福島県は原発事故で風評被害にさらされ、地元の人たちは差別されるつらさを知っています。感染者や医療従事者に偏見を持たないでほしいと訴えたいです。

6月12日(金) 神戸新聞 夕刊分

今なら放送倫理というよりも社会的に許されない企画番組でしたが、彼の本音、心の強さ、覚悟が、私達の心の琴線に角虫れて翌週の放送を楽しみにしていた気がします。